

# 白氏文集の渡來について

金子彦二郎

## 目次

- 一 正史に見えた白氏集の渡來
- 二 僧惠萼が將來した白氏文集
- 三 白氏集の渡來を語る江談抄所載の逸話
- 四 江談抄所載の逸話の肯定論者
- 五 江談抄所載の逸話の否定論者
- 六 白氏集の渡來に就ての私見
  - その一 白氏集渡來前後の年表的概観
  - その二 嵯峨帝の聖作と其の御詩風
  - その三 經國集所收聖作の剖析的研究
  - その四 承和五年以前に渡來せずと推せられる他の理由
  - その五 篁の生活と白氏集
  - その六 嵯峨帝の宸翰と白氏集の詩文
- 七 結語

白氏文集の渡來について

一 正史に見えた白氏集の渡來

白氏集渡來の我が正史上に於ける初見が文德實錄の仁明紀であるとすることは、世間已に周知のことである。文德實錄卷第三、仁壽元年九月乙未の條に、藤原朝臣岳守に關する次の記事が載せてある。

散位從四位下藤原朝臣岳守卒。岳守者從四位下三成之長子也。天性寬和、士無賢不肖、傾心引接。少遊大學、涉獵史傳、頗習草隸。天長元年侍於東宮、應對左右、舉止閑雅、太子甚器重之。三年拜內舍人。七年喪父、孝思過禮、幾於毀滅。太子踐祚、拜右近衛將監、俄遷爲內藏助。承和元年授從五位下。三年兼爲讚岐介。遷爲左馬頭。讚岐介如故。五年爲左少辨、辭以停耳（驛方）、不能聽受。出爲太宰少貳。因檢校大唐人貨物、適得元白詩筆、奏上。帝甚耽悅、授從五位上。十二年授正五位下。十三年授從四位下。特拜右近衛中將、兼爲美作守。嘉祥元年、出爲近江守。人民老少俱皆仰慕。歸罷之後、無復榮望。論者高之。卒時年四十四。

これによれば、唐土の賈人が舶載して來たものを當時太宰少貳であつた藤原岳守が適、これを發見して、彼が内舍人に拜せられた天長三年には、御年十七歳で、すでに

五言。 閒庭對雪。 皇太子春秋十

玄雲聚萬嶺。 素雪麗宮中。 帶濕還凝砌。

無聲自落空。 奪朱將作白。 矯異實爲同。

閒坐獨經覽。 紛紛道不窮。 (經國集卷十三)

の御作があり、衆藝を總べ、最も經史に耽り、諸子百家の書通覽し給はざるはなく、兼て又文藻を愛し給うた仁明帝の御趣味を思うて、これを奏上したものである。果せるかな、帝は甚だ耽悦し給ひ、此の一事の功を以て、直に位階一級を進めて從五位上を授け給ふといふほどの歡感であつたのである。しかして此の事のあつた承和五年こそは、唐の開成三年で、かの白氏長慶集の編が成つた長慶四年(我が天長元年)より凡そ十五年目に相當るのである。すなはち正史の記録であるからと言ふのみでなく、長慶集が成つてからの経過時日などの上からも、又奉獻者岳守の地位その他から推しても、この一件には疑を挟む餘地がなからうと思はれる。

## 二 僧惠夢が將來した白氏文集

經籍訪古志卷六に、白氏集に關する次の事項が記載してある。

文集零本二卷 舊鈔卷子本 求古樓藏

唐白居易撰、現存第二十八第三十三兩卷。首題「文集卷第幾」下署「太原白居易」。界長□寸□分、每行十□字。第三十三卷末記。「本云、會昌四年五月二日夜、奉爲日本國僧惠蓐上人寫此本。且緣忽忽夜間睡夢、用筆都不堪任。且充草本」了云云。(經籍訪古志)

經籍訪古志の著者は、尙右の文に追記して、「…間載寬喜三年貞永元年唯寂房寂有右金吾原泰重等書寫校點記及會昌四年舊跋。冠菅本云、本云等字、卽知金澤本係寬喜貞永間、依菅氏本重鈔。而會昌跋文亦從菅本傳錄也。」と述べてゐる。

これによれば、金澤本卽ち金澤文庫本の原本となつた菅本卽ち菅家本は前掲の如く、會昌四年…惠蓐上人の爲に云々の跋文の署書せられたもので、會昌四年すなはち我が仁明帝の承和十一年頃、僧惠蓐の歸朝と共に傳來したものと推斷することが出來よう。此の本については鈴木博士も其の著業間録中の「白樂天新樂府校勘記」に於て「菅家本は白氏の原本に次ぎ信據すべきものにして、我邦寫本白集の祖を爲す。」と説いて居る。

因に、家藏、元和戊午(四年)那波道圓木活字刊本七十一卷の白氏文集は、通行本たる白

氏長慶集七十一卷刊本に比して、目錄の所在や、卷第二十一以後の卷の序次其の他に於て、相交錯してゐる箇所が随分多い。通行刊本卷第五十七に載つてゐる「翰林制誥四凡六十八首」が、木活本に於ては卷第四十に「翰林制誥四勅書批答祭文贊詞附凡六十八首」として編入されてゐることなども其の一例であるが、該木活本卷第四十の卷末の餘白に「金澤文庫本」と校合した趣を記入した左の數行の書入の存することなどは、頗る珍とすべきであらうと思ふ。

朕君臨天下。子育群生。雖日夜憂勤。而政猶多闕。雖歲時豐稔。而人或未安。盖由斂散失於隨時。貢賦乖於任土。泉布壅而人困。穀帛賤而農傷。將思致彼小康。實在去茲衆弊。是用從宜立制。順氣布和。推皇王卹隱之心。助天地發生之德。卿等忠能輔國。善則稱君。周省表章。深嘉誠節。所賀知。

答李詞等賀德音表

右之七行、在杜佑賀德音表之下、與從史、與杜璠之間

金澤文庫本

これに従へば、木活本並に通行刊本は、金澤文庫本に比して此の一文を逸脱してゐたものか。而して此の一文を補遺する時には、卷頭の目錄「凡六十八首」は、これを「凡六十九首」と改むべきこととなる。

## 三 白氏集の渡來を語る江談抄所載の逸話

上記二種の白氏集の渡來は、それが正史上の記録であることや、跋尾文の存在や、それから會昌四年夏五月仁明帝の承和十二年樂天自身が、白氏長慶集後序に、前後七十五卷詩筆大小凡三千八百四十首集有五本……其日本暹羅諸國及兩京人家傳寫者不在此記」と手記して、生前已に我が國に渡來してゐたことを認めて居たことなどから、大方信憑して差支へないと思ふ。しかしして此の二種白集の渡來は、已に記した如く、一は承和五年の事であり、他は僧惠夢が歸朝したと思はれる同十一年或はその翌年頃の事であつて、何れも仁明帝御宇の事に屬する。然るに、ここに一つ問題となるべき一件がある。それは、白氏集の渡來を嵯峨帝の聖世なりとする大江匡房の「江談抄」によつて傳へられ、且信せられてゐる逸話の内容である。

江談抄第四の記載といふのは、次の如きものである。

閑閣唯聞朝暮鼓。登樓遙望往來船。

行幸河陽館弘仁帝御製。

故賢相傳云。白氏文集一本詩。渡來在御所。尤被秘藏。人敢無見此句在。彼集。叡覽之後即行幸。此觀有此御製也。召小野篁令見。即奏曰以遙爲

空。最<sub>レ</sub>美者。天皇大驚勅曰。「此句樂天句也。試汝也。本空字也。今汝詩

情與樂天同也者。」文場故事尤在此事。仍書之。

故賢の口傳に據つてこれを録した匡房は、此の逸話の發生を以て、嵯峨帝御在位中の事と見做したもののやうで、天皇大驚勅曰の語を用ひてはゐるが、しかしながら、必ずしもこれを以て誤りない實事と斷じざるに至らなかつたらしい心情は、其の末尾に附記した評語の「文場故事尤在此事、仍書之」とある所に、十分に表明してある。

しかるに、後世では、この逸話の全部を肯定的に是認して、白氏集の渡來を嵯峨帝の御宇と思惟して疑はないものと、白氏の渡來の時期はしかく認めるとしても、逸話そのものには信を措きかねると説く論者とが出て來た。

#### 四 江談抄所載の逸話の肯定論者

林鷲峰は「本朝一人一首」に於て、

嵯峨帝御宇。白氏文集全部始傳來本朝。云々

と述べてゐるが、其の論斷の根據は、恐らくは前記の逸話であらうとは思はれる。其の子梅洞懿は、もとより家學をうけてゐるので、其の著「史館茗話」の卷頭に、江談抄の逸

話にやや文飾を加へて、これを左の如く記してゐる。

嵯峨天皇巧詞藻。常與野篁成文字戲。一日幸河陽館。題一聯曰「閉閣唯聞朝暮鼓、登樓遙望往來船。」示篁。篁曰「聖作恰好、但改遙爲空乎。」天皇駭然曰「此句汝知之乎。」對曰「不知。」天皇曰「是白居易之吟也。本作空。今以遙字換之耳。抑足下與白居易異域同情乎。可歎可歎。」篁莞爾而退。時白氏文集一部。初傳于本朝。藏在御府。世人未見之。

(史館茗話)

他に同趣の記述を物してゐるのは、「異稱日本傳」の著者松下見林である。

今按、江談抄曰「嵯峨太上天皇得白居易文集珍之。」又越後守平貞顯、金澤文庫所藏文集第三十三後書曰「會昌四年五月二日夜奉爲日本國僧惠尊上人寫此本。」西峰(筆者註見林の號)謂「樂天所謂日本傳寫者、正謂是耶云々。」(異稱日本傳上)

見林が、白氏集渡來の年代を嵯峨帝御在位中のこととせず、其の御讓位後のこととし、鷲峰や梅洞等の鑿に倣はず、嵯峨太上天皇と稱し奉つてある點は、やゝ賢明である。さればとて、余は直にこれを雙手を舉げて同するものではなく、嵯峨帝御讓位後にしても、仁明帝の承和五年、かの岳守によつて進獻された元白詩筆以外の集を、別に御入手になつたか否かの點に就て、尙多大の疑問を抱くものであるが、とにかく、嵯峨太上天



天皇時代、即ち仁明帝の御宇に渡來した白氏集のあることだけは確認することが出来るので、見林のこの用語に贅意を表した次第である。尙見林が「會昌四年五日二日夜云々」の跋文のある金澤文庫本を以て、直に「樂天所謂日本傳寫者、正謂是耶。」と見做してゐる點は、さきに引用した「經籍訪古志」追記の文に照して、明かに其の誤なることが氣づかれる通り、頗る速斷と言はねばなるまい。

服部南郭も此の逸話の是認者であり、しかも其の時代をも嵯峨帝御在位中と見做してゐることは、其の「大東世語」の記事によつてこれを知ることが出来る。

弘仁帝時。白氏文集一部。獨藏秘府。世未有睹者。帝幸河陽館。賦詩云。

「閉閣唯聞朝暮鼓。登樓遙望往來船。」本白氏一聯也。試視野篁。篁曰「聖製改

遙作空更妙。」帝驚曰「此樂天句也。本已作空。聊試卿爾。乃卿詩情已至與白

氏同邪。」（大東世語卷二）

大日本史文學傳、小野篁の條には、其の文尾に明かに「江談鈔に據る旨を記し、白氏集の渡來を嵯峨帝御在位中の出來事として、これを記録してゐる。

弘仁中。帝幸河陽館。賦詩一聯云。「閉閣唯聞朝暮鼓。登樓遙望往來船。」以示

篁。篁曰「聖作甚佳。但改遙作空最好。」帝愕貽曰。「是白樂天之句。遙本作空。

朕聊試卿。適見卿興樂天詩情相同也。時樂天集始至。藏在秘閣。人未得見。以故大爲帝所稱美。其精詩如此。平生所作。往往有與樂天句格相似者。世以此重之云々。(大日本史文學二)

作詩志毅の著者山本北山は、その佳詩暗合の條下に、「日本史文學傳ニ」と冒頭して、弘仁年中云々の文意を假名交り文に譯し、これを引用し、此ノ二事(筆者註、他ニ今一ツノ例ヲアグ)亦暗合ノ徴トスベシ」と結んでゐる。

三浦梅園も亦、左のやうに説いてゐる。

(上略)此集始テ來リシ時、帝深ク祕シ給ヒ、閉閣ノ聯ヲ自ノ作トナシ、空望ノ空ノ字ヲ遙ノ字ニ直サセ給ヒ、篁ニ示シ給ヒケレバ、遙ノ字空ト換給ハバ、益美ナラシト奏シケル、帝モ驚セ給ヒ、是聯汝ヲ試ル也トテ、本集ヲ見セシメ給ヒシト、カカル同工ノ人モアリ。(詩轍卷四)

林蘭坡(瑜)も、此の逸話を信じて、

詩雖一字不可苟下。一字不工、全作喪佳。弘仁帝謂小野篁曰、「遊河陽館得一聯。曰『閉閣唯聞朝暮鼓。登樓遙望往來船。』篁曰、御製大佳。唯改遙作空字、則可。」上曰、此白居易詩作空。今特換一字以試汝。因謂云々(梧窓詩話二)

と記して、以て詩作上の一實例として使用してゐる。

作詩質的の著者冢田虎も亦、此の逸話の肯定者の一人である。その文に曰く、

嵯峨帝幸河陽館題一聯句曰、閉閣唯聞朝暮鼓登樓遙望往來船、以示小野篁曰、此句如何、篁少沈吟曰、聖作實佳、但願遙見、改空可也歟、帝愕然曰、此句卿素知之耶、對曰、不知、帝曰、是白居易之句也、本集作空、今朕換遙以戲試卿耳、此時白氏文集初傳、于茲而祕於御府、外人未得之見矣、篁之精於詩、非今人之所及也。（作詩質的）

最近、故岡田博士も、其の著「日本漢文學史」に於て、左の如き説をなして居る。

嵯峨帝が白氏文集を祕藏せられ、河陽館に行幸の時、

閉閣唯聞朝暮鼓 登樓遙望往來船

の句を小野篁に示し給ひしに、篁は「遙を改めて空に作ることも尤も妙ならん」と奏せしに、嵯峨帝は「卿の詩情は樂天に同じ。」と宣ひし事は、江談抄に見ゆる有名な逸話なり。之に據れば、嵯峨帝御在位中か、又讓位後なるかは明ならざれども、其の承和五年以前とするに異論無かるべし。（日本漢文學史二七八―二七九）右の記述によつてこれを觀れば、博士は明かに、白氏集の渡來は、藤原岳守が發見奏上した以前に已にあつて、嵯峨帝はそれを愛讀祕藏せられたものと認めてゐるので

ある。

五 江談抄所載の逸話の否定論者

右の如く、近世の詩人や史家が、大方江談抄所載の逸話を肯定し祖述してゐるうちに、堂々と詩論乃至創作心理の方面から、此の逸話の虚妄なるべきことを喝破してゐる者がある。それは太田錦城の門下である加藤善庵(良白)といふ姫路藩の醫員である。其の所論は實に次の如きものである。

「閉閣只聽朝暮鼓、上樓空望往來船、是樂天「春江」之一聯、而在忠州之作也。弘仁之際、始傳長慶集一部、帝嗜之、日夜披玩、禁麴之味、省臣不染指。一日幸河陽館、乃舉一聯、以為即事、唯空字作遙耳。小野篁跪奏曰、聖作玄淵、非臣等可議、然遙字、似未妥、若改空字、奈何、其言輒與原本吻合。帝大驚、遂以實告、詳載大東世語文苑矣。余竊謂、是事訛傳、何足以信、若果然、可謂君臣俱失矣。何則、樂天忠州之貶、佗僚無聊、無復洛陽宴會之歡、當是時、登臨之興、乃出於不得已、而眼前舟船之往還、但為傷懷之資耳、故以空望二字、描其羈滯失意之狀、乃下得為當矣。杜甫云、奉使虛隨八月槎、陳午亭注之曰、今繫舟不能至京華、故曰虛隨、八月槎、蓋樂天空望、杜甫虛隨、

其意一也。帝豈然乎哉。萬幾之暇、行幸出入、唯意所欲、陸則鸞輿、水則鷁首、莫不咄嗟卽辨。偶有望氣之興、八珍九醞在于前、昭容昭儀侍于後、以是觀之、夫賈帆漁舟、往來倏忽、便足以驗萬民逸樂之氣象、而山容水態、適作聖情怡悅之具。當是之時、藻思勃勃、宸翰揮灑、所下字面、遙望遠望等、俱莫有所擇。唯一空字、絕爲不可。是不唯貴賤崇卑之天淵、其苦樂之異、殆爲冰炭。若果置空字、乃帝無病而呻吟也。篁亦責神仙以奴隸之役也。其顛倒謬錯之甚、非病風喪心、殆不至于是。要是溫樹之話、人間謬傳、不獨此而已。(柳橋詩話卷之上)

天子萬機の暇を以てせられる遊覽的行幸に於て、其の優遊歡樂の情懷を抒べるに當り、邊陲僻遠の天涯にあつて、無聊不快の心情を抒べた詩句を其のまま採り來つて、卽詠卽興の詩とし給ふのは、先づ以て創作心理から見て不自然である由を難じ、よし一步を讓つて此の場合の聖作であると假定するとしても、それならば遙望でも遠望で何等差支へない筈の所を、強ひて空望と改めるやうに奏上した篁の處置は、全然不可である。「要するにこの逸話は『溫樹之話、人間謬傳』である。」と斷じた此の所論には、傾聽させられるところが多い。

抑、君臣樂易萬民逸樂の氣象をみそなはしつつ、遊覽宴集に興じたまふ際の卽興詩

中の一字について、それに對應する上句の方を改めるやうに奏することを敢てせず、却て其の眼前の景情には相應しくない、さうして白氏の原作中の用語其のものである所の「空」字への改作方を奉答した心事をば、さらに聊か穿つて考察するならば、どうやら篁は嵯峨帝御府の物とは別物の白氏集を已に所藏してゐて、私にそれを味讀して居たのではないかとさへ推せられるのである。

それはとにかく、もう一つの否定説は、久米博士(邦武)によつて、詩論的並に史的考證學の兩方面から試みられたものである。博士は、先づ

篁は有名な人だけに色々の話が残つて居れど、その頃の史傳は、時代年月の注意さへ無く、頗る小説的のものであるから、眞僞の程は如何なれど、此處に一二名高き事を舉げれば、宇治拾遺物語に、

と前置して、江談抄にも載せてあるかの内裏の樂書の語句を讀み解いた一條を引用してから、

篁の隱岐に流されぬ以前は淳和帝の末、仁明帝の初であれば、嵯峨帝の時に内裏に札を立てたといふも時代に合はぬ。又嵯峨は又仙洞御所ではなく、離宮であるに「さが無くて善からん」との落書は「嵯峨の離宮は無くて宜い」といふ意味にな

り、合點が行かぬ。思ふに、帝の崩後に嵯峨の院號から思ひついた後人の作り話であらう。(平安裏面より見たる日本歴史六九)

と説き、更に「今一つは江談抄に」と冒頭して、上來纏説した例の「閑閣云々」の逸話を引いた上、次の如き斷定へと導いて居る。

斯く言ひ傳へて、遙に作りたる句を嵯峨帝の御製と云ひならはしてあれども、是も怪しい。「唯聽」ならば、その對句は「空望」でなければならぬ。意味の上から考へて見れば明白の事だ。「遙望」ならば、その對は「閑聽」などでなければ情のうつらぬことは分りきつて居る。このやうな事で、篁の詩情詩才をいふは事々しい。

それに又、白樂天の死んだ會昌五年は我が承和二年で、即ち菅相公の生れた年である。(筆者註、白樂天の歿年以下  
の記事は再吟味を要する)白氏文集は、その以前我が國に持渡つたであらうが、「承和五年藤原岳守といふ人太宰少貳となり、唐人の貨物を檢べ、たま／＼元白詩集を得て奉りたれば、帝甚だ耽り悦び給うた。」とある。帝の御覽になつたのは是であらう。所が承和五年に、篁は遣唐使となつて筑紫に下つた後に流され、歸つて本位に復してから、僅一月ばかりの間に嵯峨上皇は崩御になつた。これらの前後つき合せて考へると、此の話も事實とは信せられぬ。(平安裏面より見た

る日本歴史六九―七〇

右のうち、白樂天の卒年や、我が年代との對照、菅公の生年、嵯峨上皇崩御の年次などには、明かに訂正せらるべきものがあるが、其の詩論の常識觀及び、時代と年月とを基礎とする史的研究法の考察などからは、啓發させられるふしゝが尠なくない。

六 白氏集の渡來に就ての私見

白氏集渡來の年代如何といふ問題に對して、以上余は前人諸先輩等の所説を概觀した。これから聊か余の管見を述べて見たい。

その一 白氏集渡來前後の年表的概觀

人物の活動、事件の發生推移等を概觀して、そこに的確な事實の把握を企てるには、その事件乃至問題を中心とした年表的記述が、最もよく其の前後關係を規定し、かつ其の確實な裏書ともなるものであることを信ずる余は、まづ左記の如き年表を作製して見た。



天皇	年號	皇紀	唐年號	嵯峨天皇御事蹟	白居易年齡	白居易事蹟	藤原岳守	其の他
桓武天皇	延暦	五一四四六	顯宗貞元 二	一歲	十五歲		篁、生ル	
		二二一	二	十七歲	三十一歲	校書郎		最澄・空海入唐
		二四六二	八	十九歲	三十三歲			最澄歸朝
		二二三	二一	二十歲	三十四歲			空海歸朝
平城天皇	大同	元一四六六	憲宗元和 元	二十一歲	三十五歲			
		二四六七	二	二十二歲	三十六歲	翰林學士		
嵯峨天皇	弘仁	元一四七〇	四	二十四歲	三十八歲	賀雨詩 新樂府五十篇	岳守、二歲	
		四一四六九	五	二十五歲	三十九歲	秦中吟		凌雲集成ル
		五一四七四	九	二十九歲	四十三歲	悟眞寺ニ遊ブ		
		六一四七五	十	三十歲	四十四歲	秋、江州司馬ニ 貶セラル		
		七二四七六	十一	三十一歲	四十五歲	琵琶行成ル		
		八一四七七	十二	三十二歲	四十六歲	廬山草堂成ル		
		九一四七八	十三	三十三歲	四十七歲			文華秀麗集成ル
		十一四七九	十四	三十四歲	四十八歲	二月、忠州ニ到ル		空海文筆眼心抄ヲ著ス
淳和天皇	長慶	元一四八〇	十五	三十五歲	四十九歲	冬、忠州ヨリ召還セラル		コレヨリ先文鏡祕府論ヲ著ス
		十四一四八三	三	三十八歲	五十二歲			六月最澄寂ス
天長		元一四八四	四	三十九歲	五十三歲	冬、白氏長慶集成ル	岳守東宮ニ侍ス	

白氏文集の渡來について

天德 仁壽				仁明 承和													
二	元	十四	十三	十二	十一	九	七	六	五	三	二	元	十一	九	四	三	二
一五二	一一一	一〇七	一〇六	一〇五	一〇四	一〇二	〇〇	九九	九八	九六	九五	九四	九三	九二	八七	八六	八五
宣宗 大中				武宗 會昌				開成				文宗 太和		敬宗 寶曆			
六	五	元	六	五	四	二	五	四	三	元	九	八	七	六	元	二	元
				(七月崩御)										(十二月崩御)			
				五十七歲				五十三歲				四十二歲		四十歲			
				七十一歲				六十七歲				六十一歲		五十四歲			
				六十九歲				六十五歲				五十六歲		五十五歲			
				七十三歲				六十八歲				六十二歲		五十四歲			
				七十四歲				六十七歲				六十一歲		五十五歲			
				七十五歲				六十八歲				六十二歲		五十四歲			
				夏、白氏文集七卷編成ル													
				八月、居易卒ス													
				岳守、正五位下				岳守、讚岐介				岳守、内舎人					
				岳守、權右中辨				岳守、太宰少貳				岳守、東宮學士					
				岳守、從四位下				元白詩、奏上				岳守、近將監					
				正月、岳守卒ス、				流サル				岳守、遺唐使					
				九月、岳守卒ス、				四月、箕召還セラル				岳守、從五位下					
				年四月、				六月、陸奥太守。				三月、空海寂ス					
				年十二月、箕薨去、				八月、東宮學士									
				年五十一													
				ヨノ頃僧惠尊「會昌四年五月云々」ノ跋アル													
				長慶集寫本ヲ傳フ													
														仁明帝十七歲開庭對書ノ詩アリ			
														五月、經國集二十卷成ル			

右の年表を通覽することによつて、白氏集並にこれに關係ある幾多の事項を闡明する爲の鍵鑰を見出すことが出來よう。例へば

紫塵嬾蕨人拳手。碧玉寒蘆錐脱囊。早春晴後  
野相公

といふ和漢朗詠集所收の詩句に對して、和漢朗詠集鈔に附説してある

大江ノ註ニ、此嵯峨天皇ノ御時、嵯峨野へ行幸アツテ返ラセ給フ時、御伴シタル小野篁ニ、サガ野ノワラビ西院ノ芦見ツルカト問ハセ給ケレバ、取アエズ、此詩ヲ作リタリ、時ニ王御感アリキ、

の文や、江談抄撰集抄第八等の所載記事の系統を引いた三浦梅園の左の所説の如きものなども、一見して直に信を措き難いものであることが判然するのである。

昔嵯峨天皇、西山ノ大井川ノ邊、嵯峨殿ニテ、如月ノ比、小野篁ニ詩ヲ作りテ奉レト有ケレバ、紫塵嬾蕨人拳手、碧玉寒蘆錐脱囊ト云句アリ、天皇御感有テ、之ヲ宰相ニ進メ給ヒシカバ、世コレヲ野相公ト稱シキ。後、唐ヨリ樂天ノ詩集ヲ贈リ來リシヲ見レバ、蕨嬾人拳手、蘆寒錐脱囊ト云句アリケルトカヤ。云々（詩轍卷四）

これなどは、篁が嵯峨上皇崩御後七年目、即ち仁明帝の承和十四年にはじめて宰相すなはち參議に任せられた事實を、嵯峨上皇御在世中又は御在位中の事の如くに誤

り傳へたもので、時代錯誤も亦甚だしい。なほ「蕨爛人拳手云々」の詩句も、余の見る限りに於ては現存の白氏文集の中には見當らないやうである。

それはともかく、余が此の稿に於て最も意を致さうとしてゐる主題は、さきにも少しく言及してあるが、逸話中に記された嵯峨帝御祕藏の耽讀書と稱せられ、かつは篋を試み給うた種本ともせさせ給うたといふ白氏集が、果して古來多くの先儒先輩等によつて是認祖述され、かつ岡田博士からも論せられた通り、

嵯峨帝御在位中か、又讓位後なるかは明ならざれども、其の承和五年以前とするに異論無かるべし。

であらうか否かと言ふ一點にかゝつてゐるのである。有體に言へば、嵯峨帝が叡覽せられた白氏集は、久米博士の所説の如く、藤原岳守が仁明帝に奉獻したそれでないであらうか。さうして、それ以前には白氏集は御覽にならなかつたのでなからうかと、余には推斷されるのである。以下少しく其の理由を述べよう。

### その二 嵯峨帝の聖作と其の御詩風

嵯峨帝の聖作は、

凌雲集に

二十二首

文華秀麗集に 三十四首

經國集に 三十八首

續日本後紀に 一首

計九十五首現存してゐる。尤も市河世寧の彙編にかかる日本詩紀には、右の外「哭澄上人」「失題」「哭海上人」の三首及び新撰朗詠集所收の「山齋喜春」の詩句とが補遺されて居り、水戸彰考館の詩集目録には、

嵯峨天皇

九十五首

二十二首 凌雲集 三十四首 文華秀麗

三十七首 經國集 一首 眞翰 木俣清左衛門藏  
一首 續日本後紀

と録されてある。

岡田博士は「想ふに嵯峨帝の詩集のありしことは何れの書にも見えざれど、三集所收以外にも非常に多かりしならん。而も詩集の傳はらざりしは誠に遺憾となさざるべからず。」(日本漢文學史一九九)と述べて居るが、經國集のみについてこれを見るに、滋野貞主の序文には「詩九百十七首」とあるのに、現存してゐる六卷所收の詩は僅に二百十首で、其の四分の三を闕いてゐるところを見ると、此の亡佚された七百七首の

中にも、帝の聖作がまだ、多數に残されてあつたことであらう。

其の嵯峨帝の御詩風は、江村北海によつて

天資好文。睿才神敏。宸藻最稱富贍。其七言近體中警聯殊多。但未免駢儷合掌。亦時風爾耳。如曰「家鄉杳杳多歸思。客路悠悠少故人。」雲氣濕衣知近嶽。

泉聲駕枕覺隣溪。」沖澹清曠。(日本詩史卷一)

と評せられて居るが、藤太沖も、論倭與唐詩の條に、次のやうに説いてゐる。

和人ノ唐詩ヲマナベル始ヲ尋ヌレバ、紀淑望古今集序ニ大津皇子ニ始マルトイヘリ、コレハ諱ムトコロアツテイヘリ。實ハ大友皇子ガ始メテ學ベルナリ、其ノ詩ヲヨムニ初唐ノ句格ナリ、懷風藻經國集ナドニ到リテ、ソコニ面白ミ出タリ、ソノ所ガヤハリ文選ト初唐ノ詩ニマナビタルモノナリ、開天ノ風味ハスキトナシ、大方初唐ノ古詩體ナリ、(中略)其時世唐使ヲ出シテ唐ニ久數居テ習タル故、字面ハ甚穩雅ニテ、氣ハ厚シ、コレ當世ニマサレルヤウナリ、惜ムラクハ格下レリ、其中ニモ菅原清公、嵯峨天皇、藤萬里ナドノ詩ハ盛唐ノ風アリ、其ノ後野篁ト菅公ノ二家傑出ナリ、トモニ白氏ヲ尊ブトイヘドモ、俗ナル體計ニテモアラズ、詩ノ語流暢ニテ意味フカシ云々。(太沖詩規)

また岡田博士は「唐の古今の諸體を兼ね能くし、諸臣の企及すべからざる所あり。殊に睿才神敏にして、氣宇崇高なる所あるを以て、其の詩も豪邁宏麗なるものあり。」（日本漢文學史一九九）と評してゐる。

これらを綜合し、且聖作を通讀した余の卑見を以てすれば、帝の御詩風の上には、謂はゆる平明清新、坦易安詳を特徴とする白氏の詩の影響は殆どこれを認め得ないやうである。これ余が嵯峨帝は、少なくとも經國集の撰せられた以前に於ては、白氏集を御覽にならなかつたであらうと臆測する一つの理由である。

### その三 經國集所收聖作の剖析的研究

更に此の臆測を確める爲に、長慶集の編成つてから、凡そ二箇年五ヶ月後に撰進された經國集所收の聖作三十八首及び藤原岳守が元白詩筆を發見奏上した承和五年より四年前、即ち承和二年の御作と傳へられてゐる「哭海上人」といふ一首の詩とに就て、余の作成した白氏詩集索引に比照して仔細にこれを點檢して見た。若し帝が、かの逸話によつて傳へられてゐるやうに、一本しかなかつた白氏集を珍藏耽讀せられて居たとすれば、當時並に後世の詩文家に共通な愛讀詩書からの影響が、必ずその聖作の上に色濃く反映してゐなければならぬ筈である。然るに、其の結果は、何れの詩

人の詩集にも、共通的に散見し、而して白氏の詩中の用語でもある

月色 漢宮 雲深 煙霽 塵衣 空堂 煙景 節候 暮塵 佳麗 行雲

曉窓 黃鳥 柔條 酣歌 形影 寂寞 造化 黃昏 銀河 閑居 泉聲

等の二字句數十語を見たのみで、三字句又は三字以上の句で特に白氏の詩語に影響せられたものと想察されるやうなものは、殆どこれを發見することが出来なかつたのである。三字句以上では、實に左の

炎涼變 寒食節 軒冕客 山水之幽奇 (白氏の句は山水之幽) 世間人

などの數語に過ぎなかつた。更に、上記の諸語句を契機として、白氏の作品と經國集中の聖作とをそれ／＼對照し、校勘して見たが、何れも、かの小野篁の

著野展鋪紅錦繡 當天遊織碧羅綾。

といふ詩句が、劉禹錫作の

野草芳菲紅錦地 遊絲繚亂碧羅天。

の詩句に於けるが如き、又かの菅公の

都府樓纔看瓦色 觀音寺只聽鐘聲。

といふ詩句が、白居易作の



遺愛寺鐘欵枕聽 香爐峰雪撥簾看。

の詩句に於けるが如き體の好き模倣乃至影響ぶりを見出すことが出来なかつた。

これ或は、余の考査が不十分であつた爲か、それとも嵯峨帝の御文藻が、岡田博士の評や、本朝百人一詩の著者鈴木氏の評の

天皇之御製諸體皆巧。而五七言最妙。蓋皇朝帝王之第一。物徂徠選皇朝正聲。

錄十五家收三十五首。而天皇獨採十七首。可見其推尊也。(本朝百人一詩)

の語などのやうに、非常に卓越俊邁であつて、白氏の詩の内容や語句や格調などを採り入れても、悉くこれを消化融合して、無縫の天衣たらしめ、凡眼のよく甄別することを許されなかつた爲かも知れない。が、とにかくもつと數多く在つたであらうと拜察される經國集所收の詩の大半が已に亡佚し、且又經國集の撰成つた御四十二歳から、崩御の御五十七歳までの約十五年間の聖作が、亦殆ど傳つてゐないので、それらと白氏の詩との比較研究も出来ないから、わづかばかりの材料の吟味で俄に推斷することは出来ないが、少なくとも經國集所收の現存の聖作には白氏集の影響は殆ど認め難いといふ點から推して、帝の白氏集叢覽は、もし其の事ありしとすれば、それは經國集の撰せられた後のことであらねばならぬと信するのである。

## その四 承和五年以前に渡來せずと推せられる他の理由

然らば、白氏集は、經國集の撰成つた天長四年五月から、藤原岳守の發見奏上した承和五年までの十一箇年の間に渡來して、嵯峨上皇の御目に觸れ、かの逸話の内容も此の年間に行はれた出來事なのであらうか。

思ふに、もし右の年間に、白氏集が嵯峨上皇の御府に藏められたとするならば、如何にそれが稀世の珍書であるにもせよ、御親子の間柄であり、殊には文藻を愛し給ひ、現存の經國集中にも已に一詩が選入されてある仁明帝である。どうして其の天覽に供せられずにおかれようか。仁明帝はかやうにして、已に太上天皇の祕府で此の集を御覽になつてあつたとすれば、後年、太宰少貳藤原岳守の發見奏上に當つて、どうしてか「甚耽悅、授從五位上」などといふが如き、斜ならざる歡感や破格の恩命のあらう筈がないではあるまいか。かねて又、我が國民の習俗としても、さやうな珍籍は、岳守の處置の如く、先づ當代の帝に奉獻すべきで、如何に嵯峨上皇が其の道に御趣味深く、天下の達者でましましたからとは言へ、當今をさしおいて、數年前に御讓位遊ばされた嵯峨上皇に、先づお初穂を奉獻することがあらうとは思はれない。

如上の理由から、余は遺憾ながら、「嵯峨帝在位中か、又讓位後なるかは明かならざれ

ども、其の承和五年以前とするに異論なかるべし。」と説いて、白氏集の渡來をば正史の記録以前にもありとする岡田博士の所説に承服する事が出来ないのである。

### その五 篁の生活と白氏集

ひるがへつて、承和五年元白詩筆渡來以後に於ける小野篁——逸話の相手方——の生活を觀るに、承和元年遣唐副使に任せられてから、可なりに多事多端な生活を營んで居り、續日本後記承和五年十二月己亥の條には、遣唐使として渡航することに業を煮やし、正使と抗論して譲らないので、次の如き運命に陥つたことが記されてゐる。

是日勅曰。小野篁内含綸旨。出使外境。而稱爲故不遂國命。准據律條可處

絞刑。宜降死罪一等處之遠流。仍配流隱岐國。(中略)副使篁怨懟陽病而留。

遂懷幽憤。作西道謠以刺遣唐之役也。其詞牽與多犯忌諱。嵯峨太上天皇覽之

大怒。令論其罪。故有此竄謫。(續日本後記卷七)

文德實錄によれば、この流謫は承和六年春正月の事とある。しかして、七年夏四月有詔特徵、八年秋閏九月敍本位、十月任刑部大輔、嵯峨上皇崩御の承和九年七月の前月すなはち、九年夏六月爲陸奥大守。(文德實錄卷四)といふ情況で、本位に敍せられて漸く宮廷への歸參が叶つたのは八年九月、其の翌年七月には嵯峨上皇崩御とあつて

見れば此の頃にも、どうもひどく逆鱗に觸れたさうして崩御間近い嵯峨上皇に供奉して「閑閑云々」といふ逸話を實演する遊覽宴樂の機會があつたとは確認しかねるのである。

按ずるに當時朝紳間の文學の偉才であつた篁を異常に推讚せんが爲に、到底常識を以ては首肯することの出來ないかの

古老相傳昔我朝傳聞唐有白樂天巧文。樂天又聞日本有小野篁能詩待依常嗣來唐之日。所謂望樓爲篁所作也云々。(江談抄第四)

などといふ虚妄談まで構へてゐた當時の篁隨喜者が英雄英雄を識るといふ立前から帝王中の隨一の詩人たる嵯峨帝と朝紳中の文學の巨擘たる篁とを相配して、事面白く捏造した談柄的佳話なのではあるまいか。

かのことしく傳誦されてゐる篁の詩句と唐人の詩句との暗合云々の如きも、或は篁は唐に渡航する爲に、鎮西に淹留中などに、白氏集や唐詩人の集などを入手してゐて、私にそれを愛讀してゐたものか、然らずんば、嵯峨上皇崩御後なほ十年間ほど生存してゐた彼が、その晩年に摸作しておいたものを、好事な後人等がこれを嵯峨帝御在位時代あたりのことに遡及附會して、傳誦させたものかであらうと思ふ。

その六 嵯峨帝の宸翰と白氏集の詩文

皇朝帝王之第一詩人と仰がれる嵯峨帝は、また三筆の一人として書道の方からも尊崇され、其の草隸に至つては最も妙、空海と併稱して二聖とまで稱せられてゐるのである。しかして其の宸翰には、初唐の詩人李嶠の詩百二十詠を物されたものや、光定戒牒や、哭澄上人などが現存してゐる。李嶠百二十詠の宸翰の現存のものは、御物の二十首と近衛家陽明殿寶書中の一首とを合せて二十一首だけであるが、最初に其の全部の目録が書かれてゐる所から観ると、百二十首すべてを物せられたのが、他は散佚してしまつたものであらうとの事である。

その靈筆の跡は、書道全集などにも掲げてあつて、何人にも鑑賞されるのであるが、余の注意は、此の御筆蹟の事から、再び嵯峨天皇と白氏集といふ問題に差しむけられるのである。

三筆又は二聖と歎稱されてゐた帝には、定めし御一代中に數多の宸翰が物せられたであらうことは想像するに難くはない。しかして李嶠百二十詠の一部や、聖作の哭澄上人詩の如き宸翰が現存してゐることから拜察すれば、他にも尙御愛誦の詩文などを數多く御染筆になつたに違ひなからうと思はれる。しかして若し逸話の如

く白氏集を御祕藏になり、御愛讀の末、臣下の詩才を試みる材料にまで遊ばされるほどに親熟せられた白氏の詩文であつたとすれば、必ずやそれらの幾分が見事な靈筆にも移されて、或は李嶠百二十詠以上の數の宸翰も後世に傳へられてあらねばならぬ筈である。然るに、眞に偶然にも白詩の詩文を物せられた宸翰の全部が散佚してしまつたと言へばそれまでではあるが、嵯峨帝の宸翰として今日傳へられてゐるものの中に、白氏の詩文の斷簡の一首半行すらも拜見することが出來ないところを見ると、こゝにます／＼嵯峨帝と白氏集との關係を絡めた逸話や、論說の眞實性に對する余の疑念が深まつて行くのである。

### 七 結 語

要するに、余は、古來殆ど無批判的に是認傳誦されてゐた白氏長慶集渡來の年代に關しては、正史に記録されてゐる承和五年が最初で、それ以前に遡つては考へられぬと信ずること、従つて嵯峨帝と小野篁とを配した「閉閣云々」の逸話は、若し、それが事實談であるとしても、それは承和五年以後の事に屬せしむべきを妥當と認めるが、先づ大體は、さる事實は存在せず、好事な後人によつて虚構附會されたことであらうと臆斷するものである。(七一、八)